

平成18年〇月14日の出来事について

申立人 父親X

1 平成18年5月14日、申立人がA子と面接交渉をした際に、A子が〇〇県にあるXXXXXXXXXに行きたいと希望した。折しも誕生日前であるA子の希望を叶えてやりたいと思い、連れて行った。その後、「おじいちゃん、おばあちゃんのおうちに行きたい」というので、連れて行ったところ、これまで常にそうであったように、母親のもとに帰りたくないと言って泣き出してしまった。当面どうしていいのかわからないので、相手方に電話をし、「今、実家におるんやけどA子が帰りたくないって泣いてるから俺はもう無理にようつれていかん。とりあえず今日のところはこっちで預かる。」といったところ、相手方は「そんなん約束が違う…5時って言ったのに、…今から迎えに行く」と答えたので、「いや、でも迎えにきても嫌がったら無理に帰すことはできんで。」と言うと、相手方はそのまま電話を切ってしまった。

しばらくして相手方代理人、〇〇〇弁護士から電話がかかり、「このままだと刑事告訴することになるから、今日中に返しなさい」と言ってきた。申立人は、なぜ刑事告訴されなければならないんだ、と思ったので、「じゃあしてください」と言うと、弁護士は黙って電話を切ってしまった。数時間後の当日午後10時頃、申立人がA子と風呂に入っていると、誰かが来たようすであり、申立人が「警察がきたんかな」と言うとA子がびっくりして「すぐ出る、見に行く、はやくはやく」とパニックをおこしはじめた。風呂場から出ると、弁護士が家にあがりこんでおり、「こんなことしてあなたの一生はめちゃくちゃだぞ!」といきなり食ってかかってきた。申立人が「本人が嫌がってるのに無理やり引きずっていくなら私が守る」と言うと、「なにがまもるだ、馬鹿なことを…嫌がってるなんてあんたが勝手に言ってるだけだろうが」と弁護士が言った。そのとき申立人はA子を抱っこしていたが、大声で食って掛かってくる弁護士を怖がってぐずりはじめたので、下ろしてやると走って行って祖母に抱きついていった。外に警察が待機していると言うので、入って貰うように申立人が言うと、私服警官2名が入ってきた。そのうちの1人が話しをしたいと言うので、応接室に通し、1対1で話した。

2 私服警官との話は概ね次のような内容であった。 〇〇警察官「とにかく、むこうが親権者なんだから返せ」 申立人「嫌がる子どもを無理やり連れていくなんて、人権どころか人道上の問題じゃないんですか？」 松野警察官「人権ならあっちの先生(〇〇弁護士)が専門家だろう…とにかく、われらは親権者から訴えがあったら逮捕せんといかんのじゃ」

申立人「子どもの人権や気持ちは無視ですか？令状はもってるんですか？」 〇〇警察官「そんなもんなくても現行犯で逮捕できるんじゃ」 申立人「じゃ逮捕してください」 〇〇警察官「だから…そうゆうことにならんためにわれらが出張ってきとるんやないか。逮捕されたらあんたの一生終わりやぞ」 〇〇警察官「ところで今どうゆう状況なんや」 申立人「相手とですか？」 〇〇警察官「そや」 申立人「調停中ですけど」 〇〇警察官

「なんの？」 申立人「親権者変更です」 ○○警察官「だったら裁判所でいろいろ言ったらええやないか。とにかくわしらがここまで出張ってきとんやから…（顔を立てろということらしい）」「あんた仕事は何してるんだ？」 申立人「一応、某工場の責任者やりますけど」 ○○警察官「ほう」「今は向こうが親権者なんだろ」 申立人「それはそうです」 ○○警察官「わしらは親権者から告訴があったら逮捕せないかんのや、わかるやろ…わしも小さい子どもおるから気持ちは判るが…それにそんなに子どもが大事ならなんで離婚なんかしたんや」 申立人「いや、裁判離婚ですよ、明確な理由もないのに破綻してるからと言って離婚させられたんです。子どものために別れないと言っても聞き入れられませんでした。」 ○○警察官「…だったらそうゆうことを裁判所で言っていけばええやないか」 申立人「しかし、こんな騒ぎになったらそれを理由に、2度と合わせない、と必ず言いますよ」 ○○警察官「それだったらわしが間に入って聞いてきてやるから」－弁護士と話しをしにいった－○○警察官「向こうはそうゆうことは絶対せんって言うてるぞ」 申立人「しかし、向こうの弁護士は今までも平然と約束を破ったりしてるんで全く信用できない。」 ○○警察官「そら、弁護士ゆうたっていろいろおるからな。しかし、警察が間に入って目の前で言うとなやし、それはないやろ」 ○○警察官「ん、1本どうや、まあ、とにかくタバコでも吸って落ち着きな」

その後も少し話し合いをした。A子はその間、警察官やまわりの者におもちゃを見せたりして一生懸命愛想を振りまいていたようだ。

3、申立人「しかし、泣いて嫌がる子どもを警察はどうするんですか？無理やりひきずっていくんですか？」 ○○警察官「……（無言）」 申立人「とにかくA子に聞いてみます」

申立人が応接室を出ると、A子は1人で二階にいた。申立人が「A子ちゃん、みんなに自分の気持ち言えるか？」と聞くと、A子「よういわん」と泣きそうな様子であったので、申立人は「そうか…」とだけ言った。A子が玄関口に降りてきたので、皆の前で、申立人「A子ちゃん、帰れるか？」と聞くと、A子「えーいやだ！帰れん、帰りたくない、ここがいい、おじいちゃんおばあちゃんのおうちがいい！」 周りの者たち「みんなでどっか行こう」 A子「みんなでいくん？」 相手方「靴はきな」A子は周りの者に外に連れ出されそうになるが、申立人が玄関口に残っているのに気がつき、A子「おとうさんは？」「お父さんも一緒に」と半泣きになっていたが、周りの者たちは追い立てるようにしてA子を外に連れ出した。たまたまなくなった申立人が裏口から飛び出すと、事態を察したA子が泣き始めていた。申立人が、なんとかA子をなだめようとして「A子ちゃん…」と言いかけると、弁護士が「ぐちゃぐちゃ言うんじゃないよ！」と横から腰を折ってしまった。相手方がA子を抱えあげようとする、A子は嫌がり、泣きながら申立人にしがみついてくるので、抱っこしてやると、「おとうさんもいっしょにいく！おとうさんの車に乗る」と離れない。その様子を見ていた弁護士は、「そんなにみせつけるんじゃないよ、おとなだったらさっさとあきらめろ」と言っていたそうだ（祖母が現認）。申立人はなんとかA子の

